

秋園、二等、角藤生、三等、寺井末吉)

〔報知新聞〕八月十五日)

同年十月頃 於有楽町三井集会所

浮世絵展覽會(二百五十五点)、懸賞電気灯裝飾図案審査(二等賞金七円、藤井忠弘)。

〔読売新聞〕十月十二日)

明治三十年一月 於日本美術協會列品館

浮世絵歴史展覽會。

〔やまと新聞〕一月七日)

明治三十二年十二月十六日、同会は日本美術協會育英部となる。

## 第二節 明治二十八年

東京美術學校第七年報 明治廿八年分

### 學規

本年中本校規則ニ関スル事項ヲ舉クレハ之ノ如シ

八月二十八日日本九月ヨリ本校學科中ニ鍛金ノ一科ヲ加ヘ生徒定

員二十五名ヲ増加スル旨達セララル

九月五日経伺ノ上本校規則第三條學科課程中彫金科ノ次へ鍛金科

ヲ加フ其課程之ノ如シ

### 鍛金科

#### 第一年

工場實習 毎週 十六時

(模造新按等鍛金ノ法ヲ習得セシム)

圖按法 全 一時

繪畫 全 十四時

金工史 全 一時

美術解剖 全 二時

考古學 全 二時

歴史 全 二時

美學及美術史 全 一時

體操 全 二時

第二年

工場實習 全 三十時  
 繪畫 全 七時  
 應用化學 全 二時  
 考古學 全 一時  
 體操 全 二時

第三年

工場實習 全 三十二時  
 鍛金圖按 全 七時

第四年

工場實習 每週三十九時  
 卒業製作

處務

本年間處理シタル事務ニ関シ往復シタル公文ノ數ハ合計六百一件  
 ニシテ之ヲ庶務教務ト會計事務トニ分チ昨廿七年中往復シタル件  
 數ニ比スレハ左表ノ如シ

類別	明治廿八年	明治廿七年	明治廿七年 ニ比シ増減
發送	一七四	一六六	八
庶務教務	一五二	一四四	八
會計事務	一四四	一九八	五四
庶務教務	一三一	一四五	一四
會計事務			
合計	六〇一	六五三	五二

本年中處理セシ事務ノ要領ヲ舉クレハ左ノ如シ

一月八日授業始ノ式ヲ執行ス廿六日參謀總長陸軍大將熾仁親王殿  
 下薨去アラセラレンニ付悼哀ノ意ヲ表スル為メ臨時休業ス 廿  
 九日故同殿下御葬儀ニ付職員生徒一同奉送ス

二月十一日紀元節ニ付 御影奉拜勅語捧讀式ヲ執行ス 二十六日  
 撰科生徒三名所定ノ課程ヲ修了シタルヲ以テ其證書ヲ授與ス

三月十一日 皇后陛下廣島へ 行啓アラセラル、ニ付職員生徒一  
 同奉送ス 第四回内國勸業博覽會へ當校彫金蒔繪兩科ノ手本標  
 本並ニ製作ニ要スル道具類ヲ出陳ス(解説2)

四月三日神武天皇祭ニ付 御影奉拜式ヲ執行ス 本校職員生徒ヲ  
 シテ第四回内國勸業博覽會觀覽ノ便宜ヲ與フル為メ経伺ノ上春  
 季休業ニ引續キ向一週間臨時休業ス

五月十五日ヨリ廿三日マテ科外講義ヲナシ傍ヲ參考ノ為近世美術  
 展覽會ヲ開キタル(解説3)ニ付取片付ノ為メ経伺ノ上廿四廿五ノ兩日臨  
 時休業ス 廿八日天皇皇后兩陛下廣島ヨリ 還御アラセラル、  
 ニ付職員生徒一同奉迎ス

六月十一日日本入學ヲ許スヘキ豫備ノ課程生徒五十五名募集(解説4)  
 スルニ依リ各新聞及官報へ廣告シ並ニ北海道長官各府縣知事へ  
 圖画講習生志望者ト共ニ入學志願者ヲ持選スヘキ旨照會ス 同  
 日本校第六年報(明治廿七年分)上申ス

七月十一日各正科及撰科生徒ニシテ本校所定ノ課程ヲ修了シタル  
 生徒二十名へ卒業證書ヲ授與シ又繪畫科卒業生下村晴三郎彫刻  
 科卒業生新納忠之介ノ二名へ在學中學業操行共ニ優等ナリシヲ  
 以テ其證書ヲ付與ス



判任官	二等助教	四級俸	一	五〇	四六	四
全	三等全	五級俸	一			
全	四等全	七級俸	六	一〇	八	二
全	全	八級俸	一			
全	五等全	九級俸	一			
實験製品場ヨリ 支弁スルモノ	雇	四百二十圓	一			
全	全	三百圓	一			
雜給ヲ以テ支弁 スルモノ	全	三百圓	一	五	七	二
實験製品場ヨリ 支弁スルモノ	全	二百四十圓	二			
判任官	書記	三級俸	一	一	一	〇
實験製品場ヨリ 支弁スルモノ	雇	三百圓	一			
雜給ヲ以テ支弁 スルモノ	全	百四十一圓	一			
全	全	六十錢	一			
雜給ヲ以テ支弁 スルモノ	全	百三十二圓	一	七	六	一
全	全	百二十圓	一			
實験製品場ヨリ 支弁スルモノ	全	六十圓	一			
全	全	百四十二圓	二			
實験製品場ヨリ 支弁スルモノ	全	廿五錢	二			

本年間ニ於ケル職員進退授業嘱託及出張等ノ重モノナルモノヲ擧ク  
レハ左ノ如シ

一月十一日學校長岡倉覺三高等官三等ニ陞叙セララル

三月二日教授川端玉章全高村光雲全石川光明全海野勝珉助教岡

崎雪聲各第四回内國勸業博覽會審査官仰セ付ケラレ第二部勤務

ヲ命セラル 十一日前記川端玉章外四名第四回内國勸業博覽會  
事務局京都出張所へ出張ヲ命セラル 同日學校長岡倉覺三從五  
位ニ叙セラル 廿九日用器畫法嘱託教員小島憲之へ明治廿七年  
四月ヨリ全廿八年三月マテノ報酬トシテ金百八十圓贈付シ東京  
府平民櫻井正次ニ鍛金科開始準備ノ用務ヲ嘱託シ報酬トシテ一  
ヶ月金拾六圓贈付ス

四月五日學校長岡倉覺三依嘱製作ニ関スル事項取調トシテ京都大  
阪兩府下へ出張ヲ命セラル (解説6) 六日助教下村晴三郎全藤岡注多  
良學術研究トシテ京都へ出張ヲ命ス

六月廿七日東京府平民平田惣之助へ鍛金科授業ヲ嘱託シ報酬トシ  
テ一ヶ月金貳拾五圓全寺井末吉へ授業用圖按ノ調査ヲ嘱託シ報  
酬トシテ一ヶ月金拾圓贈付ス

七月九日美術解剖嘱託教員森林太郎ノ嘱託及雇後藤貞行ノ雇ヲ解  
キ更ニ後藤貞行へ美術解剖彫造手訣ノ授業及授業用解剖模型ノ  
製作ヲ嘱託シ報酬トシテ一ヶ月金參拾五圓贈付ス 十五日考古  
學嘱託教員川崎千虎ノ嘱託ヲ解ク 廿六日教授福地復一へ十級  
俸ヲ下賜セラレ助教岡崎雪聲へ四級俸ヲ助教銀持忠四郎全  
藤岡注多良全岡本勝元全下村晴三郎へ各七級俸ヲ書記安井一匡  
へ三級俸ヲ給與セラレ雇新納忠之介福岡縣平民岡部覺弥各助教  
授ニ任セラレ新納忠之介へハ七級俸ヲ岡部覺弥へハ八級俸ヲ給  
與セララル

八月廿二日歴史授業嘱託教員本田幸之助ノ報酬一ヶ月金貳拾圓ニ

進ム 廿八日學校長岡倉覺三京都及兵庫縣下へ出張ヲ命セラル

九月三十日教育學嘱託教員菅虎雄ノ嘱託ヲ解キ更ニ愛媛縣土族和

久正辰へ全授業ヲ囑託シ報酬トシテ一ケ年金百貳拾圓贈付ス  
 十二月十四日願ニ依リ繪畫科囑託教員山名貫義ノ囑託ヲ解ク 廿  
 三日東京府士族關係之助へ繪画及考古學ノ授業ヲ囑託シ隔日出  
 勤報酬トシテ一ケ月金拾五圓贈付ス 廿九日教授橋本雅邦勲六  
 等ニ叙シ瑞寶章ヲ授ケラル

生徒

本年末現在生徒ノ數ハ二百壹人ニシテ皆自費通學ナリ今之ヲ前年  
 末現在人員ニ比スレハ二人ヲ減セリ而シテ其學科及道廳府縣別ハ  
 別表ノ如シ

本年中生徒ニ関スル重モナル事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

二月廿六日繪畫撰科一人 彫刺撰科二人所定ノ課程ヲ修了シタル  
 ニ依リ其證書ヲ授與ス今人名及卒業後ノ狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

繪畫撰科

自營

德 田 鎬 一 静岡平

彫刺撰科

自營

小 泉 德 治 東京士

全

名 倉 復 四 郎 東京士

六月五日ヨリ全月廿九日マテ豫備之課程及各正科并ニ撰科生徒百

五十九人ノ學年試業ヲ行ヒシニ昇級セシモノ各科ヲ通シテ百四

十六人アリ今之ヲ表示スレハ左ノ如シ

科 名	現人員	缺席者	受験者	及第者	落第者
豫備之課程	四七		四七	繪画科(三〇) 彫刺科(一六) 鍛金科(一) 鑄金科(二) 詩繪科(四) 小計	四
繪畫科 一年	一四	二	一二	一二	
繪畫科 二年	三〇		三〇	二六	
繪畫科 三年	二〇		二〇	一八	
彫刺科 一年	二		二	二	
彫刺科 二年	一〇		一〇	一〇	
彫刺科 三年	四		四	四	
彫金科 一年	三		三	三	
彫金科 二年	四		四	四	
彫金科 三年	三		三	三	
鑄金科 一年	五	二	五	四	一
鑄金科 二年	五		五	四	一
鑄金科 三年	三		三	三	
詩繪科 一年	二	一	一	一	
詩繪科 二年	三		三	二	
詩繪科 三年	三		三	三	
繪畫撰科 一年	六		六	六	
繪畫撰科 二年	一		一	一	
合 計	一六四	五	一五九	一四六	一三

七月十日繪畫科十一人(外ニ試業延期ヲ許可セシモノ一人アリ) 彫刺科一人 鑄金科二人 鑄金  
 科三人 詩繪科二人 繪畫撰科一人 名本校所定ノ課程ヲ履修シ成規  
 ノ試業ヲ完了ス今其人名及卒業後ノ狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

繪畫科 (肩ニ〇印アルモノハ普通圖畫科  
教員タルノ資格アルモノヲ示ス)

自營

全

佐賀縣有田徒弟學校

自營

大藏省印刷局

自營

全

全

全

全

全

自營

彫刺科

彫金科

東京美術學校

一年志願兵

籌金科

一年志願兵

自營

自營

一年志願兵

自營

菱田三男治 長野士

天草 友雄 熊本士

安藤 時藏 東京士

中村 端三 東京士

井上 良慶 新潟平

志賀貞三郎 石川士

小倉 要 東京士

福原謙之助 山口士

小林 一意 群馬士

戸田 忠雄 東京華

小川 三知 静岡士

後藤 省吾 和歌山士

岡部 覺弥 福岡平

望月銃三郎 静岡士

田中 後治 新潟士

染川 浪江 佐賀士

川崎伊三郎 神奈川平

毛山 正申 愛媛士

内藤源太郎 東京士

繪畫撰科

自營

八月廿六日ヨリ全月三十一日マテ本年募集ニ應シタル入學志願者

五十八人ノ入學試験ヲ行ヒシニ合格セシモノ十二人又道廳府縣

ヨリ 特選ニ係ルモノ十六人ノ内合格セシモノ十人計二十一人

アリ

九月十一日入學試験合格者十二人及道廳府縣特選生中合格者十人

並ニ規則第九條但書第二項ニ該當シ試験ヲ要セサルモノ十七人

合計三十九人ノ入學ヲ許ス 十三日規則第十八條ニ依リ學業品

行殊ニ優等ナルモノ左記十六名ヲ特待生トシ一學年間ノ授業料

ヲ免除ス

特待生姓名

繪畫科第一年

全 全

彫刺科第一年

全 全

繪畫科第二年

全 全

第三年

全 全

彫刺科第三年

全 全

繪畫科第四年

赤羽 順之 長野平

工藤 晨 青森士

河邊 正夫 岡山士

渡邊 長男 大分士

三橋 清 北海道士

齋藤 新助 岡山平

井上 清 千葉平

今田 直策 宮城平

高城 次郎 東京士

天岡 均一 兵庫士

村尾 平吉 鳥取平

信谷 友三 東京士

佐藤栄三郎 宮城平

全 全

彫刺科第四年

加藤 一郎 山口平  
鮎澤 秀夫 長野士

彫金科第四年

清水 龜藏 廣島平

蒔絵科第四年

國重 篤介 山口士

十月廿五日鑄金科一年生一人ノ追試業ヲ行ヒタルニ合格セシニ依  
リ全二年へ編入ス

本年中繪畫科卒業生ニシテ尋常師範學校尋常中學校高等女學校圖  
畫科教員免許狀ヲ受領セシモノ七人又生徒ノ願ニ依リ在學證明書  
ヲ交付シタルモノ七十二人アリ

前記ノ外本年間ニ於ケル入退學其他生徒ニ関スル事項ヲ舉クレハ  
左ノ如シ

規則第十九條ニ依リ譴責シタルモノ

一人

全 上 退學ヲ命ジタルモノ

二人

再入學ヲ許シタルモノ

二人

死亡シタルモノ

一人

研究科満期

二人

疾病事故等ニ依リ退學ヲ許シタルモノ

十四人

(道府府県別各科学徒現員表および歳出・歳入、所有物件に関する事項

は省略)

### 解説

#### 1 鍛金科設置

鍛金科設置のための具体的な動きが起こったのは明治二十六年末のこと  
で、左の記事が示すように帝国議會に鍛金科教場建築費二、六七〇円およ  
び同科教官俸給その他諸費一、四九〇円の予算案が提出された。

總豫算説明(文部省所管)〔中略〕東京美術學校鍛金科教場建築

東京美術學校に於て本邦中特絶の鍛金術を挽回進捗するの目的を以て鍛  
金科を設置し實用の工藝に應用する方法を研究せんが爲め該教場の建  
築を要す依て其費額二千六百七十圓を本年度歳出臨時部文部省所管第二  
款第四項に豫算したり〔下略〕

(明治二十六年十二月二日『教育新聞』)

○東京美術學校の政府支出金に就き

東京美術學校に於ける明治二十七年年度の政府支出金の豫算は一萬九千百  
六十八圓三十三錢にして二十六年年度の豫算額一萬六千六百四十三圓三十  
三錢に比すれば二千五百圓二十五錢の増額にて其の理由は書記の定員を  
減じ及び諸般の費途を節減し教務上必要の費用に充てたるも仍ほ特に増  
費を要するものあり本邦中古以來金工精妙にして殊に金屬を鍛煉し種々  
の器品を製作するの技術に長じ特有の意匠趣味を備ふるを以て益々其技  
術を擴張して現今實用の工藝に適應せしめば其效益々大なるべく且つ今日  
鍛金の法に熟達する者極めて少なきを以て此本邦特得の技術者を養成す